

聖書：ローマ 14：13～23

説教題：自由と愛

日時：2016年7月31日（朝拝）

ローマの教会には信仰の弱い人と強い人との間に、ある対立と争いがありました。何が問題であったかと言うと、前回の1～12節に2つのことが述べられていました。一つは肉は食べて良いのか悪いのかということ。ある人々は異邦人の市場に出回る肉は偶像にささげたものである可能性が高く、どんな処理をされたか分からないため、それを食することは身を汚すことだと考えました。一方である人々は、そのようにこだわる必要はないと考えました。もう一つは「日」の問題です。おそらくある人々は旧約以来の伝統に則り、ユダヤ人の祭りの日や、土曜日を安息日として過ごすことなどを継続していました。しかしもう一方の人々は、それらはすべてやがて来るキリストを指し示していたものであって、その方が来られた以上、以前のカレンダーに縛られるべきではないと考えました。これに加えてもう一つ、今日の箇所には議論の種になっていた事柄が出てきます。それはぶどう酒です。ある人々はこれは飲むべきではないと考えましたが、ある人々は飲んで良いと考えました。これらを巡って教会内は二つのグループに分かれて互いに非難し、争い合っていたのです。

注目すべきはパウロはどちらがより正しいかという観点から議論していないことです。それよりももっと大事なことがあるため、また牧会的配慮のゆえに、彼はそのことを前面に出していません。そのため、この箇所を読むと「どちらかがより正しいということはない」と言っているかのように読めます。しかしパウロは控えめな仕方ではありつつも、自分の立場を示しています。それは14節の「主イエスにあって、私が知り、また確信していることは、それ自体で汚れているものは何一つないということです。」というものです。それに対して一方の「肉は食べない、野菜しか食べない。」という立場の人は、2節から分かりますように「弱い人」であり、また1節から「信仰の弱い人」ということとなります。ですから単純に物を言うなら、どちらがよりすぐれた立場であるかははっきりしています。しかしパウロはその議論をここで前面に出していません。それは正しいことを言うだけでは問題は解決しないからです。ある人は白黒はっきりさせることによって決着するのではないかと言うかもしれません。しかしそうではないのです。パウロは今日の箇所ですら特に強い人々に対して次のことを語っています。「あなたの意見は正しいかもしれないが、それはそのままでは共同体に害をもたらすものになり得る」と。

まずパウロが今日の箇所で言っていることは「もはや互いにさばき合うことがないように。むしろ兄弟にとって妨げになるもの、つまずきになるものを置かないように決心しなさい」ということです。もし強い人が次のようにふるまったらどうでしょうか。「肉は食べて良いのだ！これを食べてはいけないなどと思っている人たちはどうかしている。キリストが来られたことの意味が分かっていない！我々はそれにとらわれる必要は一切ないのだ。」　そう言って堂々と交わりのテーブルで肉を食べたり、そのことをあからさまに示すならどうでしょう。すると弱い人は 15 節にあるように「心を痛める」のです。この弱い人とは主にユダヤ人クリスチャンたちからなっていたであろうことを前回述べました。彼らは長い間、律法の下で生活してきました。きよい動物ときよくない動物の区別、その他、様々な食事規定の中で生活して来ました。その本来の意図を汲み取って、今やパウロのようにキリストに心を向け、かつての方式にとらわれる必要がないことを理解したユダヤ人もいました。しかし一方にはそうでないユダヤ人もいたのです。日の問題にしても、彼らは小さい時からある特定の日に対して特別な畏敬の念を持ってきました。それを今になって突然守らなくなるのは罪を犯すことのように感じる。それはしてはならないことのように感じる。まさにそこが弱い点なのですが、その人がそう思うレベルにあるのは事実なのです。そういう人々がそばにいて見ているのに、平気で肉を食らい、これが正しいのだと言わんばかりの態度を示し、少数者であった弱い人々を軽蔑したらどうでしょうか。その人々は当然心痛めるのです。この「心を痛める」とは、単に悲しい思いをするという以上の意味を含んでいます。今述べましたように、弱い人々は少数者であったと考えられます。その彼らに対し、多数の側にある強い人々が自分たちの立場を強力に主張し、実行したらどうでしょうか。弱い少数者は自分たちも同じようにしなければとのプレッシャーを受けるでしょう。そして自分としてはそれが良いとは思わないのに、心の奥深くでは主の前にやっではいけないと感じているのに、それをしなくてはならない状況に追い込まれる。これは大変な害なのです。強い人たちはそれを見て、やっとなの人たちも我々と同じように行動するようになったかと満足するかもしれませんが、現実には弱い人々の中で起こっていることは何でしょう。それは人格破壊です。理解していないのに、罪悪感を覚えながら、それをするように強いられる。それが 15 節の「滅ぼす」という意味です。その人は深く落胆し、がっかりし、信仰が分からなくなり、その歩みができなくなってしまう。もし私たちが他の人にこのような打撃を与えるなら大変なことをしているのです。すなわちキリストが代わりに死んで下さったほどの人を私たちが滅ぼしているということです。パウロがここで言っているこ

とは、もしこのように兄弟が心痛めていることも顧みず、ただ正しさを主張するなら、あなたはもはや愛によって行動しているのではないということ。1コリント8章1節:「知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を立てます。」確かにこれは知識を持った人が陥りやすい罠でしょう。私はよく分かっている。色々な真理が見えている。しかしそれで周りの人々の欠点を次々に指摘するだけだったら、どんな結果になるか。パウロはこう言っています。「あなたの意見は正しいかもしれない。しかし兄弟を愛すべきことを忘れていたなら、その意見はかえって深刻なトラブルを共同体の中に引き起こす。」エペソ書4章15節:「愛を持って真理を語りなさい。」真理は愛と共に提示されなければ、兄弟を滅ぼす凶器になるのです。

パウロは16節でこのように言います。「ですから、あなたがたが良いとしている事らによって、そしられないようにしなさい。」私たちは良いと思うことは熱心に宣伝するものです。特に対立候補がいるなら益々そうでしょう。相手に負けられないと。しかしその結果、どんなことが起こるのでしょうか。それは神の教会がそしられるということです。特に外部の人々からです。その人はこれが良い立場であって、これこそをこの教会に徹底させなければならぬと躍起になる。そのためにはしばしの争いもやむを得ないと考える。しかし外部の人は思うのです。教会というのは何を食べるかということが関心の中心にある場所なのかな～。教会の人に近づくと、いつもしゃべっているのは、肉を食べても良いか悪いか、ぶどう酒は飲んでも良いか悪いか、あの人はこれについてこう思っていて、私はこれについてこう思っているという話ばかり。私はキリスト教に関心を持って彼らと共に信仰生活を送りたいとも思ったが、教会はどうも飲み食い議論で明け暮れているところのようだ。とするなら、そんな所にはあまり入りたくない。このようにして悪い証となるのです。そのことでそしられるのです。これは神の教会に大変な不名誉を帰すことです。

パウロは17節で神の国の中心は何かを改めて思い起こさせています。それは「義と平和と聖霊による喜び」である、と。この意味については色々な意見がありますが、一番良いと思われる注解は5章1～2節です。そこにこの「義」「平和」「喜び」の3つがその順番で出て来ます。「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいきます。」最初の「義」とは、何と言ってもローマ書の前半で強調

された「信仰による義」のことをまず考えるべきでしょう。罪人である者が、ただキリストへの信仰を通して神の前に義と認められる。まさに神の国の本質に関わるメッセージです。そしてこの義の祝福を頂いた者は、二つ目の「平和」の祝福に生きる者とされます。これは第一に神との平和であり、またそれに基づく信じた者同士の間広がる平和を意味します。そしてこの義と平和を頂いたクリスチャンは、将来完成する最終的な救いを望み見るがゆえに、三つ目の「喜び」に生きる者とされます。これはこの世の喜びとは全く質の異なる天国の喜び、天国を先取りする喜びであるため、「聖霊による喜び」と言われています。このような祝福こそ教会の中に満ちあふれ、また教会が宣べ伝えているものであるべきです。神の国は飲み食いすることではありません。果たして私たちの会話を聞いて、人々は教会は義と平和と聖霊による喜びで満ちているところだと思いませんか。そのことに焦点を当ててキリストに仕えて歩む人こそ、神に喜ばれ、また人々にも認められる人なのです。

以上のことを踏まえてパウロの結論的な勧めが19節に記されます。「そういうわけですから、私たちは、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つこととを追い求めましょう。」 次の20節に「神のみわざを破壊してはいけません」とありますように、まさにこのために神は心傾けて働いておられます。なのにその傍らで私たちが神のみわざを破壊していることはないでしょうか。この19節の目的達成のためにパウロが勧めていることは、21節にありますように「他者への愛によって私の自由を制限する」ということです。強い人が知っていることは、1コリント書でパウロが言っていますように、すべてのことはしても良いということ。すべてのことが私には許されているということ。しかしパウロが同時に語っていますように、私個人にとって良いことのすべてが有益とは限りません。そのすべてが兄弟姉妹の徳を高めるとは限りません。もし私個人がして良いことであっても、それが他者の徳を高めるものでないなら、教会の平和と建徳に少しでも障害となるなら、進んで自分の自由を制限する。心痛める人がいるなら、当分その人の前では肉を食べないし、またぶどう酒も飲まない。もちろんこれは適切な時にこれらのテーマについてディスカッションすることまでは禁じていません。むしろ折に触れて聖書は何と言っているか、キリスト者の自由とは何なのか、互いに正しく理解すべきです。しかしそのような取り組みをしつつも、そこまで行かない人もいます。無理にある考えを押し通したら、そのことで悩みの中に落ち、悪影響を受ける人がいる。その時、私たちは自分にはそれをする権利があるかどうかという観点から考えるのではなく、私の言動は他の兄弟姉妹にどういう影響を与えるかと考えてみる。そして皆の建徳のた

めには、必要なら喜んで自分が持っている自由を制限する。そうすることは良いことなのだと 21 節で言われています。

このことは決して自分の確信を投げ捨てるということではありません。22 節：「あなたの持っている信仰は、神の御前でそれを自分の信仰として保ちなさい。自分が、良いと認めていることによって、さばかれない人は幸福です。」 私たちは自分の確信は神の前に持っているべきです。しかしここでのポイントは、それを無理矢理外にも現わして弱い人に押し付け、その人々を滅ぼすようなことをしてはならないということです。心の中で神の前に正しい立場を確信しつつ、譲歩しても罪を犯すことにはならない事柄においては弱い兄弟に合わせても良い、いや合わせるべきであるということです。そうせずに正しい立場を他人に押し付けるとどうなるのでしょうか。23 節にありますように、弱い人は疑いを感じながらそれをするように仕向けられます。これは神の前に罪を犯すことではないのかと悩みながらも、肉を食べるという状況に追い込まれる。そのようにして悪いことではないかと思いつつ、それをするのは罪だと言われています。つまりこの 23 節が言っていることは何でしょうか。それは強い人が弱い人に自分の立場を押し付けることは弱い人に罪を犯させることにつながるということです。強い人には見えませんが、弱い人は良心に反して行動するように強いられます。その時、私たちは弱い人々に罪を犯させているのです！正しいことを主張するあまり、兄弟姉妹に罪を犯すように強いるとは何と恐ろしいことでしょうか。この点からも私たちは弱い人をそういう状況に追い込まないように配慮しなければならないのです。

今日の御言葉に照らして私たちの振る舞いはどうでしょうか。私たちはあることについて確信を持つと、それを熱心に主張したくなります。聖書的な裏付けがあるこの素晴らしい真理をわが教会に浸透させたいと思う。しかしそれをすぐに受け止めにくい人々もいます。その場合、どうするのが良いのか。教会の中には色々な背景を持った人、色々な段階の人がいます。教会は罪人がただキリストへの信仰によって義と認められ、それだけで構成員とされているところです。色々な点で足りないところがある人たちはたくさんいます。いや人のことを言う前に、自分だってそうです。不十分なところだらけの人間です。しかしそんな者たちを神がキリストにあって受け入れ、ご自身のものとして愛し、日々養い育てていただきます。なのに私たちがそのそばで、神のみわざをこわすことに励んでいるということはないのでしょうか。恵みを頂いた人のすることは、自分の確信を振り回すことではなく、どうしたら良く全体の益に仕えられるかということ

です。そのためには自分に与えられている自由を喜んで制限する。皆の益という目的の下に自由を従属させる。そして自分が良いと思っている事柄については一番良い仕方です。皆がそれを受け入れ、喜んで実践できるようになるのを待ち望んで、忍耐強く仕えて行く。このような人こそ、義と平和と聖霊による喜びで特徴づけられる神の国を尊び、この一層の拡大と完成に向かって神と共に働く人なのです。そういう人こそ神に喜ばれ、また人々にも認められる人なのです。